

中野三敏著 『近世畸人伝』

白石, 良夫

<https://doi.org/10.15017/12090>

出版情報 : 語文研究. 46, pp.50-53, 1978-12-01. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

紹介

中野三敏著 『近世新畸人伝』

白石良夫

出版界では、「江戸時代ブーム」だそうである。確かに、書店の棚を見渡してみると、ブームと呼んでさしつかえない盛況である。

「江戸シリーズ」と銘うった叢書の一巻として出された本書も、或いはこのブームに一役買っていることになるだろう。が、ブームの中で市場に氾濫するもののうちから、テレビの大河ドラマに便乗した類いや、本書の著者の言葉を借りれば、「著者の志のみ溢れに溢れて、対象を縦横無尽にひきずりまわすような勇ましい」態のものを除くと、事実の重みを感じさせてくれる、堅実で地味な著作はいかほどあるであろうか。尤も、ブームとはそもそもそんなものかもしれないが。

さて、本書、一般読書子好みの書名であるが、「畸人」という文字にのみ釣られて本書を読むとすれば、まず失望することうけあいである。現に、私の知人（日本文学とはエンもユカリもない人）にも、書名で本書を購入し、数ページの精読ののち書齋の隅にツンドク結果になった人がある。彼の言い分は、やたら知らない人名や書名が出てきて、しかも引用文が多く、客観的事実しか書いていないような気がする、というのであった。このテの読者には、著者の次の言葉が

そのまま答となるだろう。又、これが本書の本書たるところであり、著者の研究者としての生き方を語っているであろう。

元来が具体的な事実のみを記して、それに関する筆者の解釈は出来るだけ控えることを筆法としたつもりなので、(略中)あるいは、いたずらに事項の多きを誇らんとする玩物喪志の仕業かとのそりにも甘んじよう。著者の志のみ溢れに溢れて、対象を縦横無尽にひきずりまわすような勇ましい人物伝の氾濫は、いささか食傷気味である。遊ぶべきあまりに多くのものがあるのを目をふさいで、志のみふりまわすのは玩志喪物。かえって始末が悪かるう。むしろ玩物喪志をもってわが志としたい。

(本書「はじめに」)

逆説的な言い方であるが、伝記（に限ったことではないが）研究にとつて不可欠の要素が具体的事実であることは当然すぎるくらい当然であることを考えれば、著者の右の言は、必ずしも開き直りとはばかりは言えないであろう。

研究というのは犯罪捜査のようなもので、証拠が多く揃えば揃うほど、捜査官の推理する余地が少なくなるのであり、それだけ正確

に犯人の割り出しができるのである。その証拠を集めること、そして証拠の確実性・信憑性を見極めることに捜査官は努力を払うのである。先入観や曖昧な証拠でもって犯人を断定するとすれば、善良な市民に無実の罪を被せることになるだろうし、たとえそれが真犯人であったとしても、裁判での勝ち目はないであろう。

時代を超え現代にまで生き延びたものを天才と呼ぶなら、当然のことであろうが、我々はこれら天才たちにも目が行きがちである。しかし、天才といえども時代の子であり、二流三流あつての天才である。天才が時代を跳び超えた普遍的な存在ならば、マイナーの存在こそがその時代の諸相をより端的に具現しているのではないだろうか。マイナーに灯をあてることによって、今まで我々には見えなかった、時代に生きた天才の姿というものが見えてくるのではないかと思う。

本書に登場する五人、著者が「従来その詳伝を欠く人のみを選んだ」と言われるように、決して天才とは言い難い人たちである。いわば「文学史の空白」に咲いた花である。しかし、彼ら「畸人」と呼ばれるべき文人たちの存在にこそ、近世中期という時代相が如実に反映しているのであり、秋成や蕪村の如き天才も、こういう土壌に生れ育つたのである。著者が常々、文学史の空白を埋めることの重要性を口にされ、精力的にそれを実践していることは誰しも認めるところである。著者には、「寓言論の展開」(『国語と国文学』1045)なる秋成研究の好論文があるが、それも文学史の空白を埋める作業によつてしか生れ得ないものであることを知るならば、著者の仕事がいらずらに天才の周辺のみを徘徊するものでないことの証明になるであろう。

つまらぬことばかり述べてきたが、この辺で各篇の内容の紹介に移ろう。

「自墮落先生」 著者自身も資料不足を嘆かれるように、今日の文学史では全く忘れ去られた存在である。が、金鶏・馬馬・馬琴・春水ら、寛政以後の所謂後期戯作者たちによって江戸戯作の祖と崇められ、先生をモデルにした黄表紙まで出現するほどの売れっ子だったのである。この、有名にして、無名の文人の生涯と思想とを、少ない資料とはいいながら、著者は鮮やかに浮き彫りにされる。自らの伴りの死を演出し、南畝をして「今の世にあたり、かかる風流快活をなす事を見ず」と言わしめた自墮落先生の畸人ぶりを、著者は、「死」からの船晦と見、その背景に老荘の影響を考へるのである。本書ではさりげない書きぶりであるが、当時の学芸界における老荘思想の流行と江戸戯作発生前に果たした役割とについては、著者の「談義本研究(一)」(『国文学研究』3)で詳細に論じられており、自墮落先生思想や文業も、そういった時代の産物であったのである。

「井上蘭臺」 冒頭に「近聞寓筆」から、蘭臺の人物を示す文章をまず紹介し、著者の「文人観」が述べられている。

その足跡をあらまし鳥瞰するに、あるいは狷介、あるいは居傲、あるいは放蕩、あるいは奇矯、いずれにしろその存在は、現代なら精神病理学、精神分析学の恰好の材料となるべき人物が大半を占めることはまず間違いない。むしろ、それゆえにこそ人間としての面白さも溢み出しても可い。しかし、しばらくそれらの文人群像に関わって、その生涯なり思想なりに注目し続けると、その大半が何がしかすでに作られた文人の概念を

自己の中に包蔵して、さておのれの生活なり思想なりを無理にもそれに合せ、鉦や太鼓で文人ぶりを喧伝しようという営みが感じられて、いささかゲンナリとしてくることが多い。文人と目されることは、所詮は二流であることの証明ではなからうかとさえ思われる。

そして著者は、蘭臺に好ましい文人の姿を見られるのである。

二十三歳のとき昌平黌に入學、二十五歳にして林家員長となつた蘭臺は、その自由な學風と「門生授徒ト雖、常ニ送迎シテ僕々然タリ」という人柄とよつて、門弟は多士濟々、極めて個性豊かな人々を輩出した。「道」を論ずるとき、仁齋・徂徠に与しないことは勿論であるが、宋儒の説をも否定して、仲尼の道のみを信ずるといふ、方法論的には仁齋・徂徠の古學に近い立場をとる。そして、その精神構造は、当時の學界において顯著であつた「陽明心學流」に近いことを著者は指摘される。この指摘も、あまりにもさりげない書き方で、つい読みすごしがちであるが、当時の學界における陽明學の流行現象については、著者に「狂文意識の背景」(『文學』語學 五四・S. 44・12)なる論文が備つており、戦後における「近世思想史の画期的な発見の一つと評価されるものである。

蘭臺は、人となりは謹直で、おのれを律することにきびしかったが、他人の趣味や道楽には自由な意見を持つており、所謂俗文學への理解も積極的に示し、自らも「唐詩笑」・「小説白藤伝」という戯著を物したりするのである。初出誌で「聖堂の自由人」というタイトルがついたのもむべなるかな、である。

「佚山道人黙隱」著者の言う「具体的な事実のみを記して、それに関する筆者の解釈は出来るだけ控えることを筆法とした」典型

的なもので、当時篆刻家として名声のあつた佚山黙隱の伝を、編年体で記したものである。佚山五十九歳までの伝を、千文実巖の「佚山道人隱公伝」を基にそれを補い訂し、更に六十歳以後没年までの伝記を付け加えている。

この篇に限ったことではないが、著者の伝記研究を前にしてつくづく思うことは、資料の博搜は勿論のことであるが、その間口の広さである。広いばかりが能ではないが、しかし、とかく我々は自分の守備範囲というものを狭く限つてしまふ傾向がある。文學を過大評価するのは文學青年の悪い癖で、文學者といえば、文學(それも古代的な意味での文學)がその人の全生活・全人格を支配しているかの如き錯覚に陥りがちである。特に文人の場合、間口の広さがそもそもその属性の一つであるのだから、文人伝も、文學という狭い領域にとどまつていることは許されないのである。

「金龍道人敬雄」毀譽褒貶の激しさでは、五人のうちの最たるものであろう。ために、在世当時は京都學芸界の中心人物として、又天台の學僧として、その名声をほしきままにしていながら、著者によつて再評価されるまでは誤伝まじりの「仏家人名辞書」が唯一の敬雄伝というありさまであつた。

彼の交遊範圍は極めて広く、しかも当時の學芸界の錚々たるメンバーであり、そしてその中で敬雄は彼らから畏怖の念をもたれていた。著者には別に本篇より詳しい「金龍道人放」(『近世中期文學の諸問題』S. 41・6)なる稿がある。能う限りの資料を使って、年譜形式に記した敬雄伝であるが、著者によれば、それ以後発見の資料を加えれば、他人の著述に敬雄が贈つた序跋は六十を越えるということである。その中で、三宅嘯山の「俳諧古選」、祇園南海の「詩學逢原」、建部敏足

の『西山物語』など、いずれもその出版に敬雄も何がか関係し、序文も贈っている。これらの書の出版が近世文学史上に占める位置の大なることは既に周知の事実になっているにもかかわらず、敬雄の伝がこれまで等閑に付されていたことが不思議なくらいである。

「沢田東江」五人の中では最もよく知られている人物であろう。しかし、それは恐らく、江戸洒落本の濫觴「異業六帖」の作者としてであり、本業として三都にその名の高かった書家東江を知る人は案外少ないのではなからうか。前期戯作が知識人の余技として行なわれ、彼らの志が決して戯作などにはなかったことは、今日常識とされているところであるが、それでは彼らの抱いていた志とは何かということになると、それに答えているものは意外と少ない。当人の志を無視して余技にのみ評価を与えていては、当人も浮かべられないであろうし、又その余技に対する評価をも危うくするものがある。そういう意味で、東江もまた、著者によって初めて正當に評価を得た一人ではあった。

本篇はまず出自のことから説き始める。根拠の弱い従来の東江商家説に対して、当代人の手になる資料によって十分説を出す。林家に入門しながら、その学問は師蘭臺と同様、自由濶達で、書においては古文辞学の方法を転用して古法書学を唱え、東江流なる書流が一世を風靡するに致ったのである。本篇においても感ずることは、さまざまな分野に対する著者のすさまじいまでの知識欲である。例えば法帖など、従来の国文学者は振り向きもしなかったものである。著者は最近「沢田東江伝初稿」(『近世文学研究』S. 53・54)なる稿を草され、宝曆九年東江二十八歳までの事蹟をより詳しく記しており、続稿が待たれるのである。

本書登場の五人それぞれに共通する一面を採り出して、例えば「初期戯作者研究」とか「宝曆期漢学史」といったものが出来そうである。が、本書がそうならないところが文人伝として優れている点であり、又、我々への無言の警鐘となっていると思われる。文学史というものをジャンル別、即ち「縦割り」に見るだけでなく、「その時代の横の広がり」を充分に視野に収める」必要性を、本書は我々に教えてくれるのである。

恣意的な紹介に終始したが、最後に、本書に入るべくして入っていない「崎人伝」と、それに関連ある著者の論考を、既述の分は除いて、以下に挙げて紹介の筆をおくことにする。

「深井志道軒」『経済往来』二七の五(S. 40・7)

「大江文坡のこと」『経済往来』二七の七(S. 40・7)

「釈大我伝攷」『愛知淑徳短大研究紀要』六(S. 42・3)

「増穂残口伝」『近世中期文学の研究』(S. 46・12)

「すゝきの落穂」『近世文学作家と作品』(S. 48・1)

「狂者蘇門山人伝」『文学』四六の六(S. 53・6)

「文人と前期戯作」『言語と文芸』五一(S. 42・3)

「談義本研究(二)」『国文学研究』三六(S. 42・10)

「」(三)『近世文学研究と評論』五(S. 48・10)

「狂文論」『近世文学論叢』(S. 45・4)

「前期戯作の方法」『国語と国文学』四八の一〇(S. 46・10)

「蕃山と樗山」『文学』四一の一(S. 48・1)

「漢文戯作の展開」『江戸文学と中国』(S. 52・2)

「近世後期の思想と文学(座談会)」『文学』四六の六(S. 53・6)